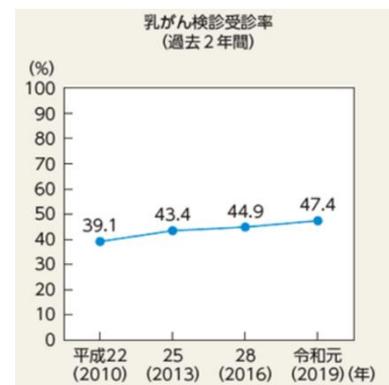


## 受診率の向上が課題の乳がん検診

### ◆女性のがん罹患数で最も多いのが乳がん、罹患率は9人に1人

毎年10月は乳がん啓発「ピンクリボン」月間で、行政、市民団体、企業などが乳がん検診の早期受診などを呼びかけている。国立がん研究センターによると、乳がんの罹患者数、死亡者数は共に年々増加し、5大がんの中では女性の場合、がん罹患数では乳がんが最も多く、女性の罹患率は9人に1人となっている。乳がんは早期発見し治療を行えば生存率が高いが、発見・治療が遅れて主要臓器などに転移すると生存率は低くなる。ステージⅠで見つければ5年生存率は97.7%だが、ステージⅢでは77.3%に低下する。

問題は乳がん検診の受診率の低さだ。厚労省の指針では、乳がん検診の対象は40歳以上、実施頻度は2年に1回で、検査方法は乳房X線検査（マンモグラフィ）が主流だ。国民生活基礎調査によると、乳がん検診の受診率は47.4%で半分に満たない。



※乳がん検診の算定年齢は40～69歳  
出所：国民生活基礎調査

### ◆東京大学発スタートアップ企業が女性にやさしい、革新的な検査装置を開発

女性のがん検診を受けない理由としては「受診する時間がない」「検査に伴う苦痛に不安がある」「健康状態に自信があり必要性を感じない」などがある。

「検査に伴う苦痛」については、乳房を圧迫して痛みを伴うマンモグラフィに代わる新しい検査機器が開発され注目されている。東京大学発のスタートアップ企業、Lily MedTechは、痛みや被ばくリスクを軽減する乳房用リング型超音波画像診断装置「COCOLY（ココリー）」を開発した。受診者が装置上でうつ伏せになり穴の中に乳房を入れると、リング状の超音波送受信機が上下に動きながら3D画像を撮影する。診断結果が検査技師のスキルに左右されることがなく、痛みや被ばくの不安もないので安心して受診することができる。同社は、21年4月に医療機器製造販売認証を取得し、同年5月より販売を開始している。

ピンクリボンなどの啓発活動により乳がんの早期発見の重要性は浸透しつつあるので、あとは検診の負担を軽減する環境づくりが必要だ。 【秋元真理子】